

〈研究ノート〉

「在台日本人」の記憶をめぐる社会学的問題構成

生活史法によるアプローチを中心として

石 井 清 輝

The Sociological Problems in the Memory of “Japanese Residents in Colonial Taiwan”: Using the Life-History Approach

Kiyoteru ISHII

要 旨

本稿の目的は、「在台日本人」の記憶をめぐる社会学的な問題構成を整理し、今後の課題を提示することである。まず、在台日本人の生活史データの収集・整備が喫緊の課題であること、またこれまでに、地域や民族、階層による生活文化の差異、各民族間の「共生」のあり様、植民地二世の独自性などが仮説的に提示されており、それらのさらなる検討が求められていることを確認した。その上で、(1) 台湾の植民地統治をめぐるマスター・ナラティヴ、(2) 引揚者集団が形成するモデル・ストーリー、(3) 両者との関係の中で語られる個々の記憶の多様性（多声性）の解明、という方向性を提示した。さらに個人の生活史データの分析にあたっては、引揚げとそれに連なる戦後経験が与える影響、及び生活世界の視野の限定性が（ポスト）植民地主義の文脈において有する限界を考慮していく必要があることを指摘した。

Summary

The paper aims to sort out sociological problems in the memories of Japanese residents in colonial Taiwan and raise future challenges. Firstly, the author has confirmed that collection and maintenance of life-history data of Japanese residents in colonial Taiwan are urgent issues and that hypothetical views on differences in lifestyle by area, race and hierarchy, symbiosis among races, and the identity of the second-generation Japanese in colonial Taiwan have been suggested

so far and need further discussion. Based on the understanding, the author offers such directions as (1) master narrative about colony integration in Taiwan, (2) model story made by repatriates' group and (3) interpretation of diversified (multi voiced) individual memories told in the relationship between master narrative and model story. In addition, the author notes the need to take into consideration the impacts of repatriation and its related experience, and the limited view on life-world may cause the restriction in the context of (post) colonialism.

I. はじめに 問題の所在

本稿の目的は、「在台日本人」の記憶をめぐる社会的な問題構成を整理し、今後の課題を提示することである¹。筆者はこれまでに該当する対象者に生活史法に基づく調査を行っており、本稿はそこから得られた語りを中心とする資料を考察していくための研究ノートとしての位置にある²。

台湾は1895年から1945年まで日本の植民地統治下にあり、数多くの「日本人」が居住していた³。しかし、「未だに日本植民地期台湾における在台日本人に関する研究は極めて少ない」（河原林；2007：230）と指摘されているように、その実態解明が十分に進められてきたとは言い難い。また、台湾において個々人の記憶に対する関心が高まり、オーラルヒストリーの収集が進められているのに対し、日本では「外地経験を有する日本人の記録を十分に整備することなく今日に至った」（河原林；2007：231）とも言われており、在台日本人の口述資料や手記などの収集・整備についても不十分な状態にある。

このように、在台日本人に関する資料整備、また研究自体が十分には進められていない。従って、その生活実態や社会意識の解明のためにも、生活史データの収集・整備は喫緊の課題といえる。その点を確認した上で、本稿ではまず、これまでの在台日本人に関する研究の成果と課題を検討していく。次に、本稿の目的に関連する植民地邦人の研究蓄積を考察する中から、今後の研究の方向性を提示していきたい。

II. 在台日本人をめぐる研究蓄積

(1) 植民地都市の生活文化史

先述のように、在台日本人をめぐる研究は決して多くはないが、近年、その生活文化の実態と変容過程に着目した顔杏如の一連の研究が発表されている⁴（顔；2007, 2009, 2011, 2016）。顔は、「従来の台湾史研究は主に台湾人を対象として進められ、在台日本人の社会的様相、意識、文化、及び台湾社会とのインターアクションなどに関心が払われてこなかった」（顔；2009：1）とし、彼（女）らの「外地」台湾における空間と時間の経験、生活文化のあり様について、当時

の新聞、雑誌、著作などを主な資料として明らかにしている。

顔の研究は、在台日本人が日本社会での周縁的な存在であり、移住先も帝国における辺境であったという二重の周縁性を帯びていたこと、時代と世代による故郷意識の相違、都市の空間形成に現れた人々の心情や意識の特性、各民族や階層毎に異なる生活リズムが国家的な時間に一元化されていった過程など、在台日本人の生活文化の多面的な様相を明らかにしており、今後の研究の基礎文献となるものである。特に、植民地の都市空間に見られる民族毎の生活空間の差異による文化的な経験のズレ、さらに各民族内でも生じる階層や地域による経験の多様性という論点は、これまでの植民地研究において繰り返し問われてきたテーマであり、今後の研究も引き継ぐべき基本的な視点となるものである。

ただし、顔の研究は新聞記事や雑誌が資料の中心であり、そのデータの特性上、一般の人々の意識や内面は浮かび上がりにくいという限界がある。そのため、今後は口述資料や個人的な記録に基づいて、より人々の生活世界に沿った形での分析が求められる⁵。また、台北が分析の中心になっているため、他地域での様相を明らかにしていくことも必要であろう⁶。

(2) 台湾の「沖繩人」研究

在台日本人の中でも特に近年、研究の進展が見られるのが「沖繩人」を対象とした領域である。関連する優れたルポルタージュも見られるが、ここでは社会学的な観点を踏まえた野入直美(2008、2013)を取り上げたい。野入(2008)では、日本帝国下の台湾と沖繩において、植民地主義が個人にとって有した意味を明らかにするため、生活史データの詳細な分析がなされている。そこからは、第一に、「植民地への移住による階層の上昇」が共通してみられるが、沖繩本島出身者たちが台湾の繁栄に加わることで階層上層し、子供たちに高等教育を与えるチャンスをつかもうとしていたのに対して、八重山出身者たちは、単身で、当座の現金収入を目的とした出稼ぎで移動を開始しているという違いが見出された(野入;2008:574)。

第二に、「台湾における『日本人』『沖繩人』『台湾人』を区分する境界は、植民地主義の規定を大きく受けつつも、重層的に錯綜し、一人ひとりが他者との相互作用のなかで結ぶ関係に伴って、変化していた」(野入;2008:581)ことが明らかになっている。沖繩人の中には、台湾人を仲間と感ずる者もいれば、日本人としてのアイデンティティをはぐくみながらも、差別の眼差しの中で、その不安定さに動揺する者もいた。沖繩人と台湾人の関係については、植民地支配の構造に規定されつつも、日常的な相互作用の積み重ねの中である種の〈共生〉関係も生まれており、それらについても「生きられた関係」と捉えていく必要があるという(野入;2008:582)。

野入はさらに、沖繩県史と市町村史に収録されている体験記録を対象として、沖繩における台湾経験の位相を浮かび上がらせることを試みている。体験記録には、個人の意識と行為のリアリティや、渡航、台湾経験、引揚げを今日の時点で振り返るといふ、時間の幅の中で把握される「プ

ロセスとしての台湾体験」が含まれている。一方で、県・市町村史にはそれぞれの自治体による理念や目的があるため、その「記録をめぐる文脈」を考慮することが求められる（野入；2013：320）。

沖縄の県史・市町村史においては、「一般住民を主体とした戦争の記録」という理念が強く、本島の地上戦を中心とした戦争体験の比重が高い。また、台湾引揚者の場合、体験の悲惨さが沖縄の地上戦に比べれば軽微であると自身が考えており、「そのことが一層、台湾居住時代と引揚げについての語りを困難にしている」状況もあるため、日常生活の記録は少ないものとなっていた。「植民地二世」である「湾生」についても、親世代の記録との相違を見出し、「異なる価値観をもった新しい世代が育ちつつあった」ことを示唆している（野入；2013：328-345）。

野入の対象は沖縄との係わり限定されているが、出身地や階層による移動と定住過程の差異、民族間の「共生」のあり様、「記録をめぐる文脈」への注目、植民地二世の独自性などの論点が提示されており、今後、他の地域や事例によるさらなる検討が求められよう⁷。これまでの台湾以外の植民地邦人に関する研究においては、同様の課題に関する議論の展開やさらなる問題提起も見られるため、以下では、それらの研究蓄積を検討していきたい。

Ⅲ. 植民地邦人をめぐる研究蓄積

(1) 「語りの場」と「語りの磁場」への視点

蘭信三（1994）は、「満洲」農業移民及び「中国残留日本人」を社会的に研究することの意義を明確にした上で進められた先駆的な業績である。蘭は、それまでの満洲移民の研究がもっぱら歴史学において行われ、その結果、満洲移民はなぜ満洲に移住したのか、どのような生活を送り、他民族とどのような関係を持ったのか、敗戦後の混乱をどのように生き抜いたのか、戦後の日本ではどのような立場にあったのか、それらの体験を現在どう回想し、解釈しているのか、等々の社会学にとっても極めて興味深いテーマが取り上げられてこなかったという（蘭；1994：11）。

これらの課題を追究するに当たって蘭は、彼らの視点に立ってリアリティを出来るだけ精確に把握し記述すること、そのために生活史法を採用して彼（女）らの「生きられた世界」を再構成し、その「生活世界」に迫ることを目標としている（蘭；1994：32）。ただし、このような方向性は研究全体において採用されているわけではなく、体験者の語りや手記の分析上の位置づけに関しても、必ずしも明確に論じられていない。

蘭（2007）は、ライフストーリー研究の深化も踏まえ、満洲移民・中国残留日本人の語りを、マクロ、メゾ、ミクロという3つの水準の中で位置付けている。まず、彼（女）らの記憶の語りは、語り手と聞き手の間の関係性と相互作用に加え、公共の記憶の語りであるマスター・ナラティブ、共通の体験を有する人々により意味づけられたモデル・ストーリーとの関連の中で生み出されている。さらに、個人の語りは、「満洲体験者がその社会のなかでどのように認識され、位置

づけられ、同時に彼（女）らとそのなかで自らの立場をどのように位置取ろうとしているかという『位置取りの政治学 (politics of positionality)』によっても規定されており、これらが「記憶の語り場 (a place to publicly talk about their experiences)」を構成している (図1) (蘭; 2007: 217-218)。

さらに、このミクロ、メゾレベルを根底から規定するマクロな「語りの磁場 (social context of narrative)」への視点も要請される。「中国帰国者」の記憶の語りには、「棄民の語り」、「継子の語り」、「祖国の語り」、「家族の語り」、「戦争被害の語り」、等々のモデル・ストーリーがあった。これらの展開を概観すると、1970年代半ばから80年代までは望郷や祖国愛を「祖国に訴える」語りが主であった。それが、90年代半ば以降には、帰国後に日本人として受け入れられながら、中国人として日本社会から排除されているという「祖国を訴える」語りになっていった。このような変化は、「語り場」の変容だけではなく、世界情勢、日中関係などと連動した、中国帰国者をめぐるマクロな歴史認識や社会認識によって構成される「語りの磁場」の転換によっても引き起こされたものだったという (蘭; 2007: 225-242)。

蘭が示す語りのミクロ、メゾ、マクロの各次元の位置付けの構図は、他の植民地の語りとその変化を分析する上でも参照軸となるものであろう⁸。ただし、桜井厚が述べるように、マスター・ナラティヴあるいはモデル・ストーリーは、「人びとの感情や生活のすべてを汲み尽くすことはできない」ものであり、そこからこぼれ落ちる個人の経験的な語りや感情の多様性が有する意味をすくい取ろうとする姿勢も求められる (桜井; 2012: 109-130)。満洲移民に関しては、蘭の

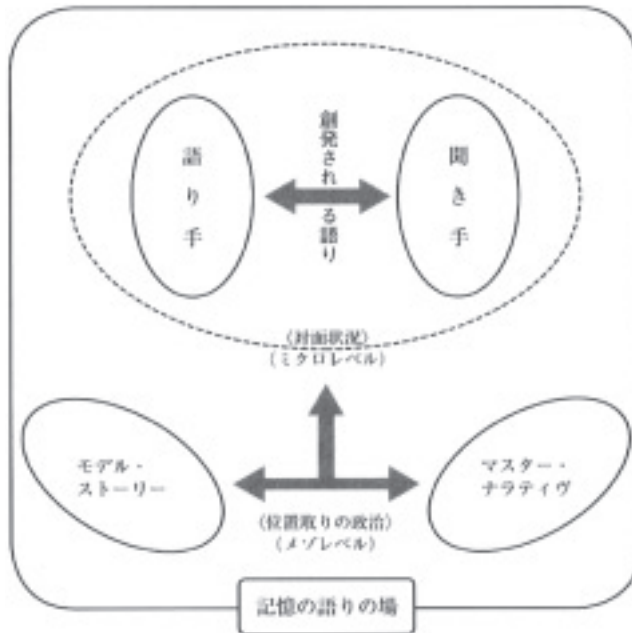


図1 記憶の語り場 (出所) 蘭 (2007: 221)

研究課題を敷衍し、現地社会の語りも視野にいたした趙彦民（2016）や坂部晶子（2008）の研究などを通して、個々の記憶の語り（多声性）の解明も進められている。しかし、在台日本人に関してはいずれの領域の研究も十分には進められておらず、今後の課題となっている⁹。

（2）引揚げと植民地支配をめぐるマスター・ナラティブ

植民地邦人に関する記憶や語りは、彼（女）らの引揚げをめぐる経験と密接に結びついており、満洲移民においても、敗戦から引揚げまでの記憶が大きな位置をしめてきた（蘭；1994：271）。一方、「日本人にとっての台湾という外地経験の引揚げ後の連続性、台湾からの引揚げの記憶の問い直しについては、十分に議論されていない」（坪田＝中西；2013：686）状況にあり、在台日本人についても、引揚げと戦後の記憶の位相について検討していく必要がある。そこで以下で、戦後日本社会における引揚げの記憶をめぐる議論を振り返っておきたい。

浅野豊美（2004）は、「在外同胞援護会」の運営とその傘下の引揚げ団体の動向に焦点を当てて、植民地での「加害」も含む諸々の体験が、引揚げ体験という「労苦」の記憶へと収斂し、戦後日本社会の公的記憶の体系に組み込まれていった過程を明らかにしている。浅野によれば、戦後すぐの状況においては、植民／引揚げ体験に対応した公的な記憶を作り出していく機会は各地で見られたが、それらが実を結ぶことはなかった。それは、「敗戦の衝撃」と、引揚げをめぐる幾多の困難、そして「未帰還者の存在」によって、引揚げ者内部の多様性や差異が覆い隠され、引揚げ時点での「共通体験」のみが強調されていったためと考えられる。その結果、『植民者』は、昭和の軍国主義の犠牲者である引揚げ者として語られるようになり、『引揚げ』の記憶も、地域や階層の違いはあるが、ほとんど例外なく、悲惨な苦勞と困難、そして現地の人々から施されたわずかな親切というモチーフが底辺に置かれるようになった」とされる（浅野；2004：309）。

さらに戦後社会全体を3つの時期に分け、それぞれの時代の引揚げと植民地認識の特徴を明らかにしているのが成田龍一（2003，2010）である。まず1950年代は、社会全体が共通の経験を有する中で自らの場合を語る「体験」の時代である。この時代の手記においては、「帝国—植民地の問題系は被害者の立場から語られることになり、『引揚げ』のなかで帝国の傷を体現した人たちが、かえって帝国を擁護し代弁する記述を行う」というものになっていた（成田；2010：98）。

1970年代からは、特定の相手に対し経験の具体相を伝える「証言」の時代である。この時代には、朝鮮半島や満洲で生まれた「植民地二世」によって、「帝国—植民地の問題系にあらたな立場と地平が切り開かれる」ことになり、森崎和江に代表されるように、『故郷』の概念への疑念、『日本』や『家族』への繊細な手続きによる批判」が提示されるようになる（成田；2003：170）。

1990年代以降は、経験者の直接の経験に依拠しえない状況へと次第に移行していく「記憶」の時代である。この時代には、それまでの語りから排除されていた人々の声に耳を傾けようとする

る姿勢が見られるようになり、文学、歴史学などの研究領域においても、帝国—植民地の非対称性を現前させることを回避するために、その「語り方」、すなわち誰に向かい、どのように語るのかということが意識的に問われるようになっていった（成田；2010：266）。

これらの議論は、戦後日本社会における植民地支配と引揚げの記憶をめぐるマスター・ナラティブを考察する上で欠かせない論点を示しているが、各地域や集団のあり方などによって生じたであろうその多様性にはあまり目が向けられておらず、分析の対象も限定されている¹⁰。特に台湾の引揚げについては、「引揚げが比較的平穏に行われたことは、他の地域の引揚者よりも早くから台湾時代を美化し、望郷の念をより一層深らしめる結果をもたらし」、その回想からは悲慘さや悲劇性がほとんど伺われず、「戦後の生活との落差もあって、平穏な引揚げと台湾時代の良さ、台湾（人）への親近感を強調するものとなっている」と、他の地域との違いが指摘されている¹¹（加藤；2003：138）。実際にこのような回想の特徴は、その語りや手記に多く見られ、ノスタルジアが基調になっているといえよう。同様の植民地時代の語りの存在は、他の地域の同窓会研究においても議論されているため、次項でそれらの検討を行っておきたい。

（3）引揚者団体におけるモデル・ストーリーと「ノスタルジアの語り」

満洲において都市住民を主な担い手として生み出されてきた「ノスタルジアの語り」に注目し、同窓会を対象としてその特性を考察しているのが坂部（2008）である。それによれば、満洲の同窓会は、まず、一般的な会と同様の活動のほかには、満洲時代の日常生活の思い出をノスタルジアと共に語り合い、共有するという特徴が見られる。次に、そこで表出される記憶の特徴として、時間が過去のある時点に固着し、現在の中国社会があわせて取り上げられたり、そこへいたるプロセスとして植民地経験が再解釈されることは稀なものとなっていたことがあげられる。

このように、「自らの生活圏にのみとどまり、その生活を支えた構造的状況にあえて目をつぶるということ」は、植民地支配の正当性を主張するような語りを補完し、「無意識的な領域での加害性を隠ぺいする機能を果たしうることは否めない」。しかしこのような限界を踏まえた上で、日常性への傾斜という想起のかたちのなかに、「理想国家論、傀儡国家論といった歴史のマクロな物語化への消極的な拒否の姿勢をみることも可能なのではないだろうか」、と結論づけられている（坂部；2008：81-83）。

佐藤量は、旅順工科大学の中国人同窓生を中心に、同窓会の動向と彼らの語りの特徴の変化を時系列的に明らかにしている。日本人同窓生のノスタルジアの語りに対して、中国人同窓生の一つ目の傾向は、「愛国心」や「侵略精神への抵抗」、「中日友好」や「国家への貢献」などの、戦後中国のマスター・ナラティブに沿う集合化された語りであった。これらは、日本との関係から彼ら自身が「漢奸」とみなされる可能性があり、自らの立場を安定させるための「ある種の生存戦略」であったと解釈できるという（佐藤；2016：193-196）。

もう一つの傾向は、特に1980年代以降に、マスター・ナラティブに沿った語りを示しつつも、

それらとは距離を置く個人的な記憶の語りが見られるようになることである。また、朝鮮半島出身者の語りでは、マスター・ナラティヴに沿ったものはほとんど見られず、「大連」という場所への思い入れが強く見られるものとなっていた。このような語りの多様性は、経験や立場、出自によって戦後の生活世界が大きく異なったためであり、記憶の階層性や多民族性を浮き彫りにするものと捉えられる（佐藤；2016：197-198）。

在朝日本人二世たちと植民地との関係を、同窓会会報や質問紙調査に基づいて明らかにしているのが曹龍淑（2003）である。まず、彼（女）らは、一般的な故郷への郷愁と同様に、「生の原点である故郷」、幼少期の思い出に「懐かしさ」を感じている。しかし、植民地時代の解釈においては、他の日本人とは異なる特有の複雑さ、内的葛藤を含むものとなっていた。それは、「自らをも植民地の被害者であると捉えつつ、それを踏まえた上で後ろめたさを感じながら、謝罪感情を持つ」人々と、現在の自らの存在を肯定するために植民地支配を肯定的に捉える人々に分けられる。ただし、どちらも「自己存在の肯定論」を前提としており、そこに「同じ境遇の集団間でしか持ち得ない限界性と脆さ」が示されているという（曹；2003：68）。

さらに、二世たちのノスタルジアは、同窓会や親睦会、母校の訪問や交流事業、望郷歌や当時の地図の製作などの活動を通してより強化されていた。これら多様な形で過去を語り、懐かしむ二世たちからは、「自らの人生の統合を通じて、内的葛藤を克服し、自らが社会によりよく適応するためにその都度形成してきた意識の正当化を行う」という傾向を読みとることができる。そのため同窓会は、既存研究で指摘されてきた「植民者意識を温め合う場」というよりも、「自分を紡ごうとする場」として捉える方が適切である（曹；2003：74）。

これらの研究は、植民地邦人の同窓会の想起の枠組みの特徴、民族毎の語りの特性とその変化、それらの背景にあるマスター・ナラティヴ、モデル・ストーリーとそこから逸脱する語りの意味など、今後検討すべき重要な論点を示している¹²。また、これまでの研究においては、植民地邦人によるノスタルジアを伴う生活世界の語りを、（ポスト）植民地主義という問題状況の中でどのように位置付け、解釈していくのかという点が繰り返し問われてきた。そのため、生活史データの分析においては、植民地のマクロな構造による規定性のなかでの、「植民していった側の人びとの生のリアリティ」の把握を目指すと共に、生活世界の視野の限定性が（ポスト）植民地主義の文脈において有する限界を慎重に見極めていくことが求められているといえよう。

IV. おわりに 今後の研究の課題と方向性

以下で本稿の検討を踏まえ、生活史法を採用した在日日本人に関する社会学的な研究の方向性をまとめておきたい。まず、在日日本人に関連する資料の整備は未だ不十分な状態にあるため、生活史データの収集・整備が喫緊の課題となっている。その上で、植民地の都市空間に見られる地域や民族、階層毎の社会意識や生活文化の差異、及びそれらをめぐる経験のズレ、民族間の「共

生」のあり様、植民地二世の独自性などについてのさらなる検討が求められている。

蘭の論考が指摘していたように、植民地邦人の記憶の語りは、マスター・ナラティブ、モデル・ストーリーとの関連の中で生み出されていると考えられる。しかし、台湾の植民地統治をめぐるマスター・ナラティブの検討はほとんどなされていないため、戦後の日台関係の変化も踏まえて、その生成、変容の過程を跡づけていくことが求められる。さらに、台湾の引揚者たちによって形成された団体を対象としたモデル・ストーリーの分析も必要である。

個々の記憶の語りを中心とする生活史データの分析に当たっては、このようなマスター・ナラティブ、モデル・ストーリーが有する規定性を意識しつつ、そこからこぼれ落ちる個人の経験的な語りや感情の多様性が有する意味をすくい取ろうとする姿勢が要請される。その際には、台湾からの引揚げとそれに連なる戦後の経験が、植民地時代の語りや記録にどのような影響を与えているのかという点、また、生活世界の視野の限定性が（ポスト）植民地主義の文脈において有する限界についても、あわせて考慮していく必要があることを確認した。

紙幅の都合もありほとんど触れられなかったが、本稿で示した課題は、これまでの植民地研究の蓄積との対話の下に検討が進められるべきものである。例えば、生活世界に焦点をあてた研究の方向性に対しては、「アイデンティティや生活世界の位相と経済・政治の領域を切り離さずに議論する姿勢が欠かせない」（日本植民地研究会編；2008：67）という指摘がなされてきた。また、研究を介した植民地主義的な関係の再生産を避けるためには、「被植民者にとって植民地支配とは何だったのかという原点に絶えず立ち返ること」の必要性が主張されている（駒込；2015：29）。このような植民地研究全体の動向との応答関係の中で、生活史法の意義と限界を自覚しつつ、課題を究明していくことが求められている。

（いしい きよてる・高崎経済大学地域政策学部准教授）

<注>

- 1 曹龍淑が「在朝日本人」という用語の複雑さについて述べているように（曹；2003：75）、「在台日本人」についてもその定義は容易ではない。本稿では1895年から1945年までの時期に台湾に居住していた日本人の総称と大まかに定義しておく。
- 2 本稿では、「生活史」をオーラルヒストリー、自伝、伝記、日記、自分史などを含む、「個人の一生の記録、あるいは個人の生活の過去から現在にいたる記録」とし（谷編；2008：4）、それらを資料として新たな知見の獲得や仮説構築などを目指す方法として「生活史法」という用語を用いる。なお、関連する用語の定義や方法論の展開については、桜井厚（2012）を参照されたい。
- 3 本稿では、「日本（人）」、「台湾（人）」、「沖縄（人）」などの用語を用いているが、それらは本質的で不動の実体ではなく、時期や状況によって変動する言説上の概念である（小熊；1998）。そのため、「満洲」等の歴史的用語も含め、本来全て括弧つきで使用すべき用語ではあるが、煩雑さを避けるため、初出時以外は括弧をはずして使用することをお断りしておく。
- 4 台湾での研究動向の整理については顔（2009）を参照されたい。
- 5 植民地都市の「生きられた世界」の解明という課題は、橋谷弘（2004）などの植民地都市史研究の蓄積の中に位置づけていくことで、その全体像の理解に寄与するものになるだろう。
- 6 台湾の文化研究全体の動向については宮本正明（2005）を参照されたい。
- 7 同様の観点を踏まえた台湾における沖縄人の研究として、松田ヒロ子（2011、2016）がある。
- 8 ここで蘭が依拠する、「いま・ここ」という時空間での語りの共同的な構築性とその分析を重視する「対話的構築主義」の立場には、語られた歴史的事柄の「事実性」を等閑視しているという批判がなされてきた。この議論の検討は本稿の範囲を超えるが、さしあたり、語りの位相を過去の歴史的出来事の展開を表す「物語世界」と、インタビューの場を基盤とし、

物語世界の枠外での評価や態度を示す「ストーリー領域」に分け、前者にインタビューの場からの一定の自律性と過去のリアルさを認めた上で、それぞれの位相に則した分析を行うという桜井（2012：76）の方向性を採用しておきたい。この点については、蘭（2015）の議論も参照されたい。

- 9 馬場公彦（2014：167-204）が指摘するように、そもそも1980年代まで、日本のメディアや論壇における台湾に関する議論は乏しく、論調の政治的な偏りも大きいため、戦後日本社会での台湾統治をめぐるマスター・ナラティブを対象化するための方法自体が大きな課題となるだろう。この点については、森宜雄（2001）も参照されたい。
- 10 各地の引揚げの実態や資料整備の状況については、阿部安成・加藤聖文（2004a, 2004b）などを、また、研究の蓄積に関しては、今泉裕美子ほか編（2016）を参照されたい。
- 11 加藤聖文は、財団法人台湾協会を中心とした引揚者団体が、朝鮮や樺太などの場合と異なり、政官財界への一定の影響力を保持し続けたことを指摘している（加藤；2003：138）。植民地期の台湾に関するマスター・ナラティブやモデル・ストーリーの形成過程の分析においては、このような引揚者団体が有した影響力も考慮する必要があるだろう。台湾からの引揚げについては、河原林直人（2007）も参照されたい。
- 12 上海からの引揚者のノスタルジーに注目した研究に高綱博文（2009：333-360）があり、階層、年齢、職業、ジェンダー、エスニシティなどの要因に関係して、多様で複雑な様相を呈していることを指摘している。

<参考文献>

- 阿部安成・加藤聖文，2004a，『「引揚げ」という歴史の問い方（上）』『彦根論叢』348：129-154。
 阿部安成・加藤聖文，2004b，『「引揚げ」という歴史の問い方（下）』『彦根論叢』349：51-68。
 浅野豊美，2004，「折りたたまれた帝国—戦後日本における『引揚げ』の記憶と戦後の価値」細谷千博・入江昭ほか編『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房，273-315。
 蘭信三，1994，『「満州移民」の歴史社会学』行路社。
 蘭信三，2007，「中国『残留』日本人の記憶の語り—語りの変化と『語りの磁場』をめぐる」山本有造編『満洲 記憶と歴史』京都大学出版会，212-251。
 蘭信三，2015，「オーラルヒストリーの展開と課題—歴史学と社会学の狭間から」大津透ほか編『岩波講座 日本歴史第21巻 史料論』岩波書店，209-241。
 馬場公彦，2014，『現代日本人の中国像—日中国交正常化から天安門事件・天皇訪中まで』新曜社。
 顔杏如，2007，「二つの正月—植民地台湾における時間の重層と交錯（1895-1930）」『日本台湾学会報』9：1-21。
 顔杏如，2009，『植民地都市台北における日本人の生活文化—「空間」と「時間」における移植、変容』東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士論文（未刊行）。
 顔杏如，2011，『「帝国の時間」と植民地台湾—天長節と紀元節を例として』『日本台湾学会報』13：51-75。
 顔杏如，2016，「歌人尾崎孝子の移動と植民地経験—在新生女性思潮中航向夢想的『中間層』』『臺灣史研究』23（2）：65-110。
 橋谷弘，2004，『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館。
 今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編，2016，『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社。
 河原林直人，2007，「引揚げ後の邦人『南方』経験の行方」中京大学社会科学研究所編『南洋群島と帝国・国際秩序』慈学社出版，228-264。
 駒込武，2015，『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』岩波書店。
 松田ヒロ子，2011，「植民地台湾における沖縄系移民のエスニシティ—『沖縄人』をめぐる葛藤と実践』『白山人類学』14：7-30。
 松田ヒロ子，2016，「植民地台湾から米軍統治下沖縄への『帰還』」『文化人類学』80（4）：549-568。
 宮本正明，2005，「植民地と『文化』」『年報日本現代史』10：195-210。
 森宜雄，2001，『台湾／日本 連鎖するコロニアリズム』インパクト出版会。
 成田龍一，2003，『「引揚げ」に関する序章』『思想』955：149-174。
 成田龍一，2010，『「戦争経験」の戦後史—語られた体験／証言／記憶』岩波書店。
 日本植民地研究会編，2008，『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社。
 野入直美，2008，「生活史から見る沖縄・台湾間の双方向的移動」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版，559-592。
 野入直美，2013，「沖縄における台湾引揚者の特徴—引揚者在外実調査票と県・市町村史の体験記録を中心に」蘭信三編『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版，305-350。
 小熊英二，1998，『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社。
 坂部晶子，2008，『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』世界思想社。
 桜井厚，2012，『現代社会学ライブラリー7 ライフストーリー論』弘文堂。
 佐藤量，2016，『戦後日中関係と同窓会』彩流社。
 曹龍淑，2003，「在朝日本人二世の朝鮮・朝鮮人に対する意識形成の研究—在釜山日本人を中心に」『アジア社会文化研究』4：50-80。

「在台日本人」の記憶をめぐる社会学的問題構成

高綱博文, 2009, 『「国際都市上海」のなかの日本人』研文出版.

谷富夫編, 2008, 『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.

坪田＝中西美貴, 2013, 「戦後台湾をめぐる人の移動の研究史」 藺信三編『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバルイズムの交錯点』勉誠出版, 667-690.

趙彦民, 2016, 『「満洲移民」の歴史と記憶—開拓団内のライフヒストリーからみるその多声性』明石書店.

付記) 本稿は平成28年度高崎経済大学競争的研究費による研究成果の一部である。